

「やっぱり、世の中金だな。それが真理ってものだろう」



「え〜っ！ そんなあ〜っ！」



「ふふっ」

小鳥が文句を言って、真貴子が勝ち誇ったように…… しかし、どこかホッとしたように笑う。



「お金なんて稼げばいいじゃない。それよりも、若さは二度と取り戻せないんだよっ！」

「稼げばいいって……お前、真貴子がどれだけ稼いでると思ってるんだ」



「どのくらい？」

「いや、俺も知らんが……」



「なにそれっ！」

「ただ、俺達が想像できないくらい稼いでるのは確かだ」

「……だよな？」



「想像にお任せするわ」

真貴子が小さく肩を揺らして笑う。

もはや、小鳥のことなど負け犬のようにしか見ていないようだった。



「それじゃあ、行きましょう」

「おう」



「荒浜さあんっ！」

「じゃあな、小鳥。気をつけて帰れよ」



真貴子に誘われるまま車に乗り込む。

車種なんて全然わからないけど、黒光りするデカイ車だ。

俺達が乗ったのを確認して、運転手はスマートに発進させた。

向かった先は……いつもの部屋だった……。



「さっ、好きなものを食べてちょうだい」

真貴子の部屋に通された俺を待っていたものは、テーブルの上に並べられた豪華な食事だった。

今夜はいつもにも増して種類が多いな。

まるで、どこかのレストランのメニュー全てが並べられたみたいだ。

「こんなに食えないぞ」



「好きなものだけ取ってくればいいのよ」

「そうさせてもらうよ」

テーブルの席について、早速料理に手を伸ばす。

どれもうまそうで、すでに腹がぐうぐう鳴っていた。

「もぐっ……もぐっ……もぐっ……」

「相変わらずうまいな」



「気に入ってもらえて嬉しいわ」

「今更だが、お前って毎日こんなの食ってるのか？」



「まさか。これは、貴方のために作らせてるのよ」



「私は……何もないときはコンビニのパンで済ませるときもあるし、自分でカップラーメンを作ることもあるわ」

「カップラーメン？ お前が……？」



「意外でしょう？」

意外というか、にわかには信じがたい。

真貴子がカップラーメンを食べてる姿なんて、ちょっと想像ができなかった。



「豪華な食事は、仕事の席で食べることが多いの」



「そうすると、いわゆるジャンクフードが急に恋しくなるときがあるのよね」

「なるほど」

確かにどんなうまいものでも、連日続けば飽きがきても不思議じゃない。

そんなとき、カップラーメンが食べたくなくなるという気持ちは、俺にもわからなくはなかった。

「妙な感じだな。俺と真貴子が同じもの食ってるって考えると」



「そう？ 値段の高いものだけを美味しく感じるわけじゃないわよ」



「なかなか自分で直接は行きにくいけど、ハンバーガーとか買ってきてもらうこともあるんだから」

「そうなのか。 意外な事実が発覚していくな」

ちょっとだけ親近感を覚えてしまう。

そういうのは一切口にしないと思ってたけど、意外と色々食べてるんだな。



「もしも……」

「ん？」



「もしも、私と結婚することで自分の生活が縛られると思っているのなら、そんなことはないから安心してくれていいわ」



「今の仕事を辞めるつもりはないけど、貴方に負担をかけようとは思ってないし」

「いや、そんなのを考えたことはない」

「ただ……俺は今のままだが一番いいからな。 誰かと結婚しようとは思ってないだけだ」



「貴方らしいわね」

結婚を強く求めてくることもなく、真貴子がどこか遠くを見るような目で笑う。

何となくだが……いつもと少し雰囲気が違うような……。

「お前、もしかして疲れてるんじゃないのか？」



「あら、どうして？」

「そんな顔してるからだ」



「そうかしら？ いつも通りだと思うけど……」

「……仕事は忙しいのか？」



「お陰様でね」

「ちゃんと食って寝てるのか？」



「健康管理には気を遣ってるつもりよ」

「明日は何時起きだ？」



「そんなこと聞いてどうするのよ？」

「いいから教えてよ。何時に起きるんだ？」



「……4時くらい、かしらね」

「おいおい」

想像以上に早い。

俺なんかをもてなしてる場合じゃないだろう。

飯を食わせてもらえるのはありがたかったが、それで真貴子の負担になっているようなら意味がなかった。

「ご馳走さん。 充分食ったし帰るよ」



「えっ？ まだ、いいじゃない」

「よくないだろう。 今から寝て、どうにか十分な睡眠時間が確保できるくらいじゃないか」



「……心配してくれてるのね」

「俺のせいでぶっ倒れられたりしたらたまらんからな」



「ふふっ……」

真貴子が楽しげに笑う。

小さく肩を揺らしたあと、ゆっくりと首を横に振った。



「気持ちは嬉しいけど、本当に体のほうは大丈夫よ」



「それよりも私にとっては、貴方が少しでも長く一緒にいてくれたほうが癒しになるの」

「俺が……癒し……？」



「貴方にその自覚はないかもしれないけど、私が心を開いて話せるのは貴方だけなのよ？」

「それは……まあ……」

真貴子の性癖を知っているのが俺だけだとすれば、確かにそういう位置付けにはなるだろう。

そして、それを利用して金をせびったりしないあたりに、相応の信頼を置いてくれてることもわ

かってはいる。

真貴子のいる場所っていうのは、きっと俺が想像してるよりもドロドロした世界なんだろうな。



「そうよ。今日はちょっと仕事で疲れてるの。面倒な相手に嘘笑いをし続けてね」



「だから……もう少しだけそばにいてちょうだい」



「こうして一緒に食事をしてきているだけで……寂しくはないから……」

「……………」

真貴子のしんみりとした雰囲気、俺は言葉を詰まらせてしまった。

いつもとは明らかに雰囲気が違う。

これは……たぶん本音なんだろう。

俺にそばにいてほしいと——

——いや、本当はそれ以上のことをしてほしいと思っているに違いない。

それなら、ここまで言われたのなら、その気持ちに応じないわけにはいかなかった。

「はっ、腹がいっぱいになったら少し運動したくなってきたな」



「えっ？」

「何か手軽に運動できる方法があるといいんだが……」



「……………」

「真貴子もどうだ？ 食べてばっかりだと太るぞ？」



「……失礼ね」

真貴子がクスッと笑いながらつぶやく。

俺の意図したところを、すぐに汲み取ってくれたらしい。



「隣の部屋が空いてるわ」



「どんな運動にするかは……任せてもいいのかしら？」

「もちろんだ」

これで互いの意思疎通はできた。

もう言葉を交わす必要はない。

椅子から立ち上がって、まるで恋人のように真貴子がしなだれかかって来て、俺はその肩を抱きながら隣の部屋へと移動した。

今夜はどんなふう to 真貴子を責めてやろうかと、頭の中ではそのことばかりを考えていた……。



「んぐ、ううっ……んんんんっ……！」

「よし、こんなもんだろ」



「う、ああ……あああ、おお…………！」

口を強制的に開かせるマスクを装着させて、俺は満足げにうなずいてみせた。

ちょっと……いや、かなりヤバイ光景だ。

誰がどう見ても、ヤバイ道具で犯そうとしてるようにしか映らない。

実際、特性のマスクで口を開けた真貴子の姿に、俺は今まで感じたことのない興奮を覚えていた。



「はぐ、あ……んう、うっ……あああっ……」

「まあ、喋れなくて当たり前だよな」



「ああううっ……………」

「俺のチンポが欲しいか？ 口の中に突っ込んでほしいか？」



「う、あ……ああ……………」

真貴子がコクコクとうなずく。

口の中では舌がいやらしく蠢いていて、チンポが入ってくるのを今か今かと待ち侘びていた。

本当は聞かなくてもわかってる。

こんな物をつけなくたって、真貴子は喜んで俺のチンポをしゃぶるだろう。

拒むなんてことはありえない。

それをわかっていながら、あえて雰囲気を楽しむためにこのマスクを利用したのだ。

そういう意味では……効果は抜群だった。

「それじゃあ、早速入れてやるか」

ズボンから勃起したチンポを引っ張り出す。

それを見たとき、明らかに真貴子の目の色が変わった。

期待に満ちた視線を、チンポに感じた。



「んぐっ……む、ううっ……んぐううう………ツ！」

「ん、んんっ……これは、普通とは違う感じが……」



「ぐごっ、お、ごっ……！？」

「おっと、失礼」

強制的に開いた口は全く抵抗がないから、チンポが一気に根元まで入ってしまった。

先端がのどの手前を突いたようで、真貴子は少し苦しそうだ。



「ん、ごっ……ごふっ、う……んぐむっ……ず、ぐちゅっ……！」

「おお……」

生温かい舌がすぐに絡み付いてきた。

チンポの亀頭から裏側まで、丁寧に舐め始めた。

唾液が塗りたくられる感覚が、想像していたよりも気持ちいい。

尿道口をくすぐられるように刺激されると、思わず腰を後ろに引いてしまった。



「ん、ぐむっ……ん、うっ……」

「こっちからも、動くぞ」



「ん、ぐむっ……んんんんっ……！」

真貴子の頭を掴んで、腰を前後に振り始める。

最初はゆっくりと、あまり乱暴にならないよう努めた。



「んぐむ、うっ……ん、ぐ、ぐっ……ぐぐっ……！」



「れろっ、ちゅっ……ちゅぱっ……れろっ……お……」

「ああ、いいぞ。 そうやって舌でしてくれ」



「れろっ、お……んん、ぷっ……れろれろっ……れろおっ……！」

真貴子の舌が、俺のチンポに絡み付いてくる。

亀頭やカリへの刺激を中心に、心地良さを伝えてきてくれた。



「れろっ、ちゅぷっ……ん、んんっ……ううう……」

「んっ……んっ……んっ……」



「ぐむっ……う、んんっ……う、お……おおお……」

チンポからじわじわと快感が広がってくる。

悪くない。

いや、もともと真貴子はフェラチオも上手かったから、悪くなるはずがないのだ。

ただ、これでは普通とも言える。

マスクをしているだけで、普通のフェラチオと変わらないとも言える。

もう少しだけ……強めにしてもいいか……？



「んっ……んんっ……ぐ、むっ……ううっ……」

「んんっ……少し、速く、するぞ」



「ん、う、ううっ……」

「いくぞ」

真貴子がうなずいたのを確認して、チンポの速度を少しずつ上げていく。

亀頭を口の裏側に擦り付けるようにしながら、徐々に官能を高めていった。



「んぐっ！？ ぶ、ぐっ……もごっ……おおっ……！」

「んんっ……んんっ……んんんっ……！」



「も、ぐもおっ……お、ん、んぐっ……ごっ……ごもおお……ッ！！」

「ああ、これは……………」

官能がグンツと高まってくる。

今までにない心地良さが広がってくる。

気持ちいい。

チンポに痺れのようなものが感じられたが、それもまた快感へと変わっていった。



「げふっ…………う、ぐも、お…………ん、ぐぐっ…………おっ…………！」

「苦しいか？」

「苦しかったら…………そうだな…………俺の手を2回叩け」



「ん、ぐむっ、ぐ…………もごっ…………お、おお…………ツ！」

本当に苦しいときの合図を決めて、真貴子が小さくうなづく。

何も拷問してるわけじゃないんだ。

互いに楽しめるギリギリのラインを模索するのが大事だった。



「ん、ごっ…………れろっ、う…………げほっ………… ん、んぶっ、ぐっ…………んぶううう…………ツ！」

真貴子の口から豚のような声が漏れる。

俺の動きに合わせて必死に頭を振っていて、まるで奴隷のような光景だった。

口にはめたマスクが、今日は一段とその雰囲気をも強めていた。



「んぐむっ…………お、ごっ…………げふっ…………ごほっ…………お、ご、ごごごっ…………！」

「くっ、すごいな」

「フェラチオっていうより……オナホ使ってるみたいだ」



「ん、んぶ、おっ……ぐもっ、お、んぐっ、んごっ、んごごごごごッ！！」

真貴子の目に涙が溜まる。

まだ、合図は送ってこないが、それなりに苦しいのは間違いないだろう。

果たして、いつまで耐えられるのか。

俺のためにどこまで耐え続けてくれるのか。

それを考えるだけで、体はよりいっそう興奮していった。



「んぐもっ、おごっ、う……ん、ぐぐっ…… ぐむっ……う、んんんんっ……………！」

「くっ……あ、うっ……」



「ん、ぐっ……ん、ん、んっ……んぐもおおお……ッ！！」

真貴子の口から唾液がこぼれ落ちる。

苦しげに眉間にしわを寄せたが、それでも必死に頭を動かし続けていた。

フェラチオそのものよりも、真貴子のこの表情がたまらない。

チンポはガチガチに硬くなって、射精感はどんどん高まっていた。



「んぐもっ……げぶっ、お……ん、ご、ごっ…… んぐもっ、ぐ、おお……ッ！」

「んっ……だんだん、イきそうに、なってきた……」

「このまま……くっ、真貴子の、口の中に……出すぞ……」



「ぐむっ、うっ……んぐっ、んぐっ……！」

苦しげな表情を浮かべながらも、真貴子が二、三度うなずく。

俺が求めているものは、全部受け止めてくれるつもりのようなだった。

舌を懸命に動かして、チンポを舐め回してくれていた。

「くっ……！」

快感が広がってくる。

心地良さが全身に染み渡ってくる。

このまま出したい。

真貴子の口の中に、俺の精液を全て注ぎ込んでやりたい。

野蛮な衝動が胸の奥からわき上がってきて、俺はさらに腰の動きを加速させた。



「んぐむっ！ う、んぐぐっ……む、ぐもっ、おおお…………ツ！！」

「くっ……イクぞ……もう、イクぞ……ツ！」



「んぐむっ、むむっ、う……ん、んぐっ、ぐ、ぐうっ…… んんんんっ……！！」

「んっ……んっ……んんっ……！」



「んぐもっ、おごっ、ご、う、げほっ…… お、んぐもっ、ぐも、お、んぐもおおおツツ！！」



「もぐおおんぐうんんううううう…………ツ！！！」

「うっ！」



「ぐもおおおおおおおお…………ツツ！！！！」

腰を前に突き出して、真貴子ののどの奥へと精液を流し込む。

強烈な快感が下腹部から広がってきて、俺は思わず体を仰け反らせてしまっていた。

「ああ……」



「んぐぐごうッ！！？ ぐぼッ、お、ごお……ん、ぐ、ぐむっ……ううう  
ううう………ッ！！！」



「ごくっ……ごくっ……ごくっ……ごくごくごくっ………！」

真貴子がのどを鳴らしながら、口の中に出された精液を飲み込み始める。

ゆっくりとした速度ではあるものの、できるだけこぼさないようにしようという努力が伝わってきた。



「んぐっ……ぐっ……ぐうっ………」

「いいぞ。ゾクゾクするな」

「こんなの見せられたら……1回いったくらいじゃ収まりがつかないな」

チンポはまだまだ硬く勃起していて、全く衰える様子がない。

口でするのも良かったが、やはりここから先は直接繋がりが良かった。



「んっ……ふあああああツツ！！？」

特製マスクを外して体勢を変えて、俺は後ろから真貴子のマンコを貫いた。

柔らかな肉ヒダと、ぬるっとした愛液が包み込んできて、チンポを奥のほうへと引き込んでいく。

まるで、マンコで食べられてるような感覚に、俺は思わず熱い吐息を漏らしてしまった。

「は……ああっ……あ………」



「ああっ、深い……ところまで……あ、あっ、んんっ……！」

「フェラチオしただけで、こんなに濡らしてたんだな」



「あ、んんっ……だ、だって……」

「くっ……チンポが絞られる……」

心地良さは一気に広がってきて、加減する余裕などなく、俺は最初から腰を激しく動かしてし

まっていた。

さっき射精してチンポが敏感になってるからこそ、腰を動かすのを止められなかった。

「んっ……んんっ……！」



「あんっ……ああんっ、ん、んっ……く、ふああんっ……！」

「うっ、いいぞ……その、調子だ……」



「はあぁっ、動いて……んんっ、おちんぽが…… あ、あぁっ、中を、擦ってきて……ひあ  
んっ！」



「もっと……あぁっ、もっと、激しく…… ん、んんっ、突いて……突いてっ、突いてっ……突い  
てえっ……！」

「こう、か？ こんな感じ？」



「んっ……んんっ……い、いっ、それ……く、ふっ…… 気持ち、いっ……あぁっ、んうう  
ああああああ……ツ！！！」

腰を素早く前後させて、マンコの壁に亀頭を擦り付ける。

官能はチンポが一往復するたびに高まってきて、下腹部の奥に熱いものが巡った。

まだ、挿入したばかりだが、それほど長くは我慢できそうにない。

いや、そもそも我慢する気が全くなくて、射精感は勢いよく高まってきていた。



「んふぁっ！ あぁっ、奥に、当たるっ…… ん、んんっ、気持ちいいいい……ツ！」

「くっ……んんっ……！」



「あ、そこっ……そこが、いいっ……ああっ、たまらない……ッ！」



「んっ、んんっ、んっ……んあっ、あ、はあああッツ！！」

「すぐに……いきそう、だ……ッ！」

チンポがはち切れんばかりに膨らむ。

痺れのようなものが広がって、カウパー液が染み出しているのがわかる。

イきたい。

早く射精したい。

頭の中にあるのはそのことばかりで、腰のピストンは加速する一方だった。

「うっく……入れた、ばかりだけど……イク……ぞ……ッ！」



「き、きてっ……ひああっ、私の、んんっ……おまんこの、中に…… あ、ああっ、出してっ……射精、して……ッ！」

「んっ……んっ……んんっ……く、ふっ……ううっ……！！」



「んああっ！ あ、あっ、ひああっ！ んあっ、あああっ、あああっ……！！」

「イ……イク……ッ！」



「あああああツツ！！！」

射精はすぐに訪れた。

チンポの中から、真っ白な精液が噴き出した。

快感がどっと押し寄せてきて、下半身がぶるりと震えてしまう。

「んっ……くっ……！」



「は、ふあっ……ああっ……ん、ん、ああっ……！」



「熱い、精液っ……ふあっ、入って、きて……んんんっ……！」

「くっ……まだまだ……ツ！」

射精しながら腰を振り続ける。

精液を搾り出しながら、次の快感を追い求める。

今日は気分が乗っている。

たった一度出ただけで終わるつもりは全くなかった。



「は、ああっ……くるっ、んっ……きてるっ……ふ、あ、ああッ！」

「まだ……今日は……何度でもイクぞ……」



「あんっ！ 奥につ、ひ、あっ…… 子宮、う、んんっ、押し上げ、られる……ッ！」

チンポは少しも萎えなかった。

硬く勃起したまま、真貴子のマンコを突き続けた。

膣内には精液が溜まっている分、さっきよりも動きやすい。

快感は体の芯まで染み込んできて、何度も熱い吐息が漏れた。

「んんんっ……！」



「ふ、はあっ……ああんっ……！ ん、ん、んんっ！ んんんうっ！！」



「ああっ、気持ちいい……気持ちいい、ところに…… ひうっ、おちんぼ、当たってる……ッ！」

「このへん、か？ このへんが、いいんだろ？」



「そこっ……あ、あっ、そこが……い、ひいんっ！ そこがいいのおおツツ！！」

強い快感を得るたびに、真貴子のマンコがぎゅっと締め付けてくる。

チンポが絞られて、心地良い快感が広がってくる。

膣壁にカリが引っ掛かると、太ももの内側までゾクツとした刺激を感じる。

それを連続して味わうと、自分でも想像していた以上に射精感が高まってきた。



「ひあんっ！ あ、ん、んんっ……く、ふあああッ！」

「んっ……また、イケそうに、なってきた……ッ！」



「イって……あ、ひあっ、私の、中で…… おまんこで、また……あ、ああっ、イって……イってえ……ッ！」

「もちろん……何度だって……イってやる」



「あ、ああっ、ひ、はあっ……あ、ん、あっ…… あああっ、あああああ……ッ！！！」

腰を強く動かす。

チンポを激しく出入りさせる。

今日はすでに2回イってるが、全く何の問題もなかった。

3回目の射精は、すぐそこまで迫っていた。

「ん、んんっ……イクぞ……ッ！」



「きてっ、ん、はあっ、きてっ……きてっ……あ、あああっ……！」



「私の、おまんこに……んんっ、おまんこに、また…… あ、ひああっ、おちんぼ、からっ……！」



「貴方の、んんっ、たくましい、く、あっ、おちんぼからっ、ひ、ああんっ、せ、精液をつ……精液をおお……ッ！」

「うっ！」



「ふあああああああああ………ツツ！！！！」

今度は少し腰を引いた瞬間に出た。

精液の塊が、ドロッとマンコの中にこぼれ落ちた。

「んんっ……！」

二度、三度と繰り返して、どんどん精液を出した。

思いっきり射精した。



「あ、ふっ、ああっ、き、きたっ…… あ、んああっ、精液、あ、ああっ、入ってきてる……ツ！」

真貴子が気持ち良さそうに体を震わせる。

マンコの中もものすごくうねっていて、チンポが絞られるような感じがした。

射精しながら、頭の中では次の射精のことを考えている。

快感を得ているはずなのに、体がまだまだ足りないと訴えていた。

イきたい。

もっとイきたい。

腰を荒々しく前後に振りながら、俺はチンポで子宮を突き続けた。



「んひあっ！？ あ、ふあっ、ああっ……ま、まだ……！？」

「まだ、イクぞ……くっ、これで、終わりじゃないぞ」



「んあっ！？ す、すご、いつ、ひあっ……貴方、って……本当に……ん、ん、ん  
んああツツ！！！」

チンポにぬるぬるとした感触が広がる。

精液と愛液の混ざり合ったものが、チンポの皮の内側まで染み込んでくる。

快感はどつと体に押し寄せて、手足がぶるりと震えた。

「んっ……くっ……くうっ……！！」



「あふあっ……ひあっ、あっ……んあっ……あああっ……！！」



「い、いいっ！ おまんこ、気持ちいいっ！ んああっ、おちんぼ、擦られるのが、あ……あ  
ああ……ツツ！」

「くっ……イク、ぞ……ツ！」

「このまま、また……真貴子の中に、出してやるぞ……ツ！」



「ふあああっ、出してっ……あ、んああっ、私の、中に…… ん、んんっ、おまんこ、の、  
中あ……あ、ふあっ、んひいいっ！！！」

「んっ……んんっ……！」

しつこいほどに官能が高まってくる。

快感が手足の先まで染み込んで、ついには思考さえ鈍っていった。

もうイクことしか考えられない。

自分の中に精液が残っているのかもわからなかったが、胸にわく欲望のままに腰を振り続けた。

「くっ……イク……う、あっ……いきそう、だ……ッ！」



「ふ、ああつ……ん、ひあつ、あ、あ、あああつ……！」

「真貴子、イク、ぞ……このまま……ッ！」



「い、いいわっ……ふあつ、このまま……全部……んんっ、い、一滴、残らず……あ、ああつ……！」



「精液っ、全部、う……んあつ、全部出してっ……あ、ああつ、私の、おまんこっ……おまんこにっ……ん、ひあああつ……！」

「くっ……ううっ……んんっ……！」



「あ、ん、はあつ……ひあつ、あ、ああつ……あああつ……あああ  
あああ……ッ！」

「くあ……ッ！！」



「ひあああああああああツツ！！！」

チンポの奥から熱いものが噴き出した。

精液の塊が押し流されて、真貴子のマンコを満たしていった。

そして——



「あああああああああああああああああああ——  
——ツツツ！！！！！！」

チンポがずるっとマンコから抜けて、精液が辺りに撒き散らされた。  
まだ、こんなにも残ってたのかと驚くほどに、真貴子の体を白濁に染めていった。



「あ、ふあつ……すご、ひっ……ん、はあ……ああああ……」



「体が、あ……あ、んっ……熱い、い……ふああああ……」

「くう、あ……あああ……」

もう言葉が出ない。  
快感に絞るような声を漏らすことしかできない。  
久しぶりの連続射精。  
こういった激しさが、真貴子とのセックスの魅力だった……。



「はあ……」

部屋に戻ってきて椅子に座って、真貴子が大きく溜息をついた。

相当に疲れたのは間違いない。

……本当にやって大丈夫だったのか？



「そんな顔しないで。私もしてほしいと思ってたんだから」



「大丈夫。今夜はぐっすり眠れそうよ」

「それならいいが……」



「貴方ってぶっきらぼうにしてるわりには、相手のことを気遣ったり心配したり……優しいわよね」

「おだてても何も出ないぞ」



「思ったことを言っただけよ」

「相手が調子悪そうだったら……心配するのは当然だろう」

そんなことを言いながら、真貴子から視線を逸らす。

真貴子の言葉が本音だとわかるからこそ、褒められるのはくすぐったかった。

「ま、本当に気をつけろよ。俺と違ってぶっ倒れたりできん体だろ」



「ありがとう。気をつけるわ」

「んじゃ、そろそろ帰るとするよ。今日もご馳走さん」



「あ……」

「んっ？」



「ん、その……貴方も疲れてるんじゃない？ ベッドなら用意できるし、帰るのは明日の朝にでもしたら？」

「それは……」

予想外の誘いだった。

ここにはもう何度も来ているが、一夜を明かしたことはない。

必ずアパートまで送り届けてもらっていたから、ここに泊まっていくという発想自体がなかった。

「せっかくだが遠慮しておくよ。部屋が広すぎて落ち着かないだろうからな」



「そう」

「じゃあな」



「ええ……またね」

そう言って、真貴子が儂げな笑みを浮かべる。

俺なんかが本当に必要とされてることが、改めて感じられた。

言葉にはできない……不思議な気分だった……。